



○ 日本側所蔵記録

| 資料番号 | J. III-11 | 資料名 | 寿老人図 |
|---|-----------|-----|------|
|  | | | |
| <p>紙本墨画（縦×横）42.0×55.1cm</p> | | | |
| <p>1636年に来日した第3次通信使の画員・荷潭が描いた寿老人の図。「朝鮮国人 荷潭之写」と署名していることや、寿老人は日本人に好まれた画題であることから、荷潭が来日した際に日本側の依頼を受けて制作された作品の可能性はある。一方、賛文は18～19世紀初の佐賀藩の儒学者・古賀精里（1750～1817）の書。絵の制作と賛文の年代には100年以上の開きがあるが、荷潭が日本に遺していった作品に、のちに精里が着賛を行ったと推測される。</p> | | | |
| 資料番号 | J. III-12 | 資料名 | 松下虎図 |
|  | | | |
| <p>紙本墨画（縦×横）123.3×54.5cm</p> | | | |
| <p>1764年に来日した第11次朝鮮通信使の騎船将・卞璞（1741頃～？）が描いた、朝鮮民画風の虎の絵。この回の画員は金有声であり、卞璞は騎船将という立場から本来であれば江戸には赴かず大坂に留まるはずであったが、絵画に長けていることから江戸まで随従したと考えられる。1764年3月、通信使一行が江戸からの復路の途中、神奈川県大磯の宿場にて休憩をした際に描かれた作品と推測される。通信使が各地において日本人と交流を深めた様子を彷彿とさせる作品といえよう。</p> | | | |